

齡乃集

全

829-5

俳諧資料カード

年代 文政十一年

編者(筆者) 聴吹

書名 齡の集

備考 同貯

印  
初字又

(下垣内蔵)



静々居采賀

於乃采

周防岩田

聽吹輯

吳市阿賀北五丁目三番八号  
下垣内和  
電話〇六三二七一九八号  
〒737

密無罪

自叙

予は幼くして父の教を蒙りて  
 孝行を修むるに志す。然るに  
 父の死後、母を養ふに乏し  
 しく、兄弟も皆不肖にして、  
 家業を継ぐ者なし。予は  
 幼くして父の教を蒙りて、  
 孝行を修むるに志す。然るに  
 父の死後、母を養ふに乏し  
 しく、兄弟も皆不肖にして、  
 家業を継ぐ者なし。予は

幼くして父の教を蒙りて、  
 孝行を修むるに志す。然るに  
 父の死後、母を養ふに乏し  
 しく、兄弟も皆不肖にして、  
 家業を継ぐ者なし。予は  
 幼くして父の教を蒙りて、  
 孝行を修むるに志す。然るに  
 父の死後、母を養ふに乏し  
 しく、兄弟も皆不肖にして、  
 家業を継ぐ者なし。予は



百韻

浄光

柳舟

堪忠の二まを思ひ長く事う共

晴ふをむと宿れ共と婦を 徳吹

遠くよ笑ひとさし山ありて 雪舟

海のこぬるをさく石あり 揚波

多きはきのまん種も育ちけり 浮舟

面相持し旅よ運ぶ糸 雪橋

孰もまて仄々物。朝了月 明也

輝うまらうよ二石 十也 友鷲

ウ 小ししと萩京及志下まじり 麓川

く黒木あゆませし牛け 勤む 琴友

はるはの赤きつられて枝 流る 里深

ふいふ何し平きと貞 徳の後 自示

又船鏡うし遠きうな ぬれも 備余

自愧れ契りも同け ち徒く 明凡

世次を先てきんぬり川續き 片赤  
 網治の舟一輪はれぬ 如流  
 志りなき翁ききよきあり月夜  
 せんと古ふを現持多敷 浦例  
 今宵しゆ星をハツウセツをく 文狸  
 厄をひきも晴きくぬえ 月弓  
 せりしききかけきく 柳下  
 乳母の庵ぬぬ 和雛の立活 権聖

三  
 着る綿の裾小籠よ 其衣けあり 市丹  
 吹くきくも川とて 柳糸  
 道れとくぬき子猿も 鷲の尻 五毛ふ  
 ありきくし 念佛 池多  
 森はらも 捜き徳所 此物て 柳芳  
 降り後むすのききり 松本  
 多るきり 小まき けし 此高  
 知年しもの 明ききぬ氏 素風

はくしとささるるふとて服て叱り 起御

ほんと軒の傾くは柳の 柘弓

羊腸と巡りてきてはもん坂 五雲崖

麻界りさるぬ小枝高き領 後斗

秋の内て初より丹入るも久しかり 起隣

秘意の菊も咲て 馥郁 青岬

<sup>ニウ</sup>程くまきとしは秋を同じ頃 路耕

倉箱鬼了り利生ありまゝ 赤糸

糸一糸と身法もぬと方へあり 露白

やうともし多て呉りやまじは 赤籬

まゝふし一世見照しの風景を 柳舎

燈籠く廻りまゝや朝風 具象

仁政のたゞまゝよ入つを糸 不必

しをまゝとてはも利のたゞく 一峯

鳥のさうまをて涼む門の月 有方

まゝりて後とよふ夕之 徑之

何事も造化自然たる理を 文志

こふやとてとてを而ん子室 亦亦

あこころを羨むに并の長者様 湖夕

陽をきき子 罪人の様 可笑

<sup>三</sup>阿蘭陀の後う牛ののたまふと 益糸

うまはき今よて没け目遠む 洗鼻

ほつり気よ伸しく角とおうり 鳥矢

佛を急悲る懺悔くく 獨示

幾世経一松も蓋はるまふ處 旭岡

笑も始皇のう爵きくむ 柗居

ゆふよ入れ吐くや中体せり消し 壽連

我あうと余経とてをささむ 珠之

谷川うらまきさも凄ぶ本曾の笑 孤月

六の無れ猿がやよりや笑とと 東英

笑もれい純赤人も侮らむと 以鳥

セ夕あるをせり一 短冊 籬屋

片破れの月を直つてさし氷き 合垢

あつてもくまは嶺越れ鷹 佳流

<sup>三ウ</sup>いしを竹葉しつる産駒の坊 川南

お宮にささるや 定りたる空を とき

逸くともや釣るとあり 移りて 舟吃

あまは信るし 潮の信し 志山

浮くそは軍さふちかて紐と解 芳秀

入まを貸しやまははる史を 賢 西耕

横河よはれと服よまじし 梅へ 毛凡

こけりて今も月の月には照ちり 砥山

あちちゆく兵の紅雲を替りて 鏡の

緑へ投るるまうりし 玉章 巴丹

牽捨し馬を頼りし 高杉の 住光

あつてよもあつて世は 冠孝

さき海をよもあつて世は 指井

背をさしてさるる名をわく 仙遊



とよ君も入る洞と多々遠く 一步

腹まゝの沢とけておろし 後休

彼名本〜のとも持たせり〜 孤舟

南より又北の道とるのとき 琴糸

限らば又歌ひと花とては 鳥勢

おもしろまや名よ流し噴 皓月

冬之洞一題二章

常と頼此群居る岩もけり哉 時越

り中や交々射埒る筈不處 皓月

乙鳥やほんと暮り鞠以下 徳吹

雪にけりや洞をそお撲らて居り 月弓少年

破ら失せぬてほの教し〜の梅、 枕雪

苗代や葉山子れいも新ど〜、 冠雪

汎せども寂ひ〜自我の茶も持る 獨示

淵中へ小笠持て戻り〜の事 後休



ぼつみりぬりし枝戸一倅 至儀  
 五つよして祖文もねむや凡中 結束之  
 眠り〜尾とぬ。牛や花のちり 以鳥  
 凍ぬや駒下駄のりぬけ交り 白堂  
 草のよかや牙列〜うらみき畑 洞席  
 ぐさ〜あまこあはち〜おや朝庭 從鼻  
 鼻枕して振うくと天ろ山葵が 抱嬰  
 ち書と姑〜〜花よむ孫うね 十月 赤書

老〜とも老をぬぬらに柳う率 一以  
 俣ちや箒も下もふき老の久 市月  
 半風や浮いて海ふわう少 三五 岬山  
 敷入や出せとまきむ流牙は士 自示  
 摘草や凡の身へまき〜限〜裏 青城  
 ふり〜と〜意か妹もあそ社社の声 又志  
 仮法武の路と眺ぬ星の初 五葉  
 陽きや抱書書の乾く岩の上 枕芳

嶺の秋移れ障子や二は冬  
 雛子やあけ灯も消えぬ下  
 山吹くま 哇子しや おはる月  
 山吹や旭の流よりかへりて色  
 流のやうにうららかに下弦の歌  
 孤月 一步 北朝 備例 佳流 和作 芳秀 妙瑞

きこえても生かして琴弾くむら哉  
 まるくも青いまきりききりや  
 急もうらや浮くや過りの入江川  
 若船や又網の目をとめて死ひ  
 元山もあや代終つてつらふ  
 霞の草やま入る残系松一樹  
 曇るや吹くもぬけよむら枝  
 弊利のぬきてきくあふれと余を  
 石流 不笑 在り 妙流 孤舟 川南 一峯 會坂

代捲戸と魚も伏しよし大り 浮月  
さく飛来や旭き一思む牛の臭 不仙遊  
妙よ身一一家よ所きてまきの苗 少突る示  
心ぶらや懐も忘らるゝ眠る行り 雲連  
梅子や梅と紙入とぬ山とく声 吸吾舟  
雨さぬのぬえとく一之と中はなれ哉 三巴月  
明りや新子よ別れく油の雲 路耕  
鬼凡中やいふ言ふふらよ思を思せ 女少産

中宗とや及佛部を破る岩 望凡  
持もあふま文と云し一接もうの 烏笑  
牛馬をいふ持もし一草の事 三有方  
おの外とほこほのくし山さる 隣翁  
携り捨れのを塊久思ふ一取 指木  
階ようしうて思くる脊やや為杖 清文裡  
猪の歯や縁申るささくを走り 徐川  
鞠坪もあふよ新く柳の影 忠り

脊への矢も暖をあつらう花の弁 傳江 不ふ

うりまうと燈も帯あり温い川 揚皮

梅咲や裏道とあつらぬうも傍 峠市 此友

より新や下も竹とまきわて梨 久保市 西耕

咲くやけし休むし七曲り 赤木

霞のるふや浅霞のあつらぬ明うら 世ふ 志志

照う地を履こもあつらぬとよ啼け性 親う

昔のむや小京女もふ右たり 水あ

代播や牛切ふ交う招う燈 赤木

尖うきれ枝もわくものあつらぬ 益糸

とと撃し見れとあつらぬ 何門 風

あ代の因う端ふや怪お井戸 比小

望揺りや洞交れまゝぬのあつらぬ 下松 橋

央うるあつらぬあつらぬ夕にうら 燕子

斗比もあつらぬ紀りやあつらぬ 注之

陽きやあつらぬとあつらぬ 支鷲

形代の気とみみ暮しなるま羽我 鳥羽  
 十少よ眠りてはくは 徳山 山 飄々  
 鳥羽宿りて下 入彦 ぬれ中を  
 山吹やよ 旭洞 一後也とも  
 牛参りて居れ 片茶 是れ多 女 畑竹枕  
 三月月了 少年 四の秋気う夕 赤籠 重彦  
 出代や尾北 麓川 柳んく 扇 是り  
 夫見たり 赤山 子よ持 赤山 たり 赤山 風車

赤菊丸道 赤菊丸 志枝 赤菊丸 柳や 赤菊丸 山柳 赤菊丸  
 若草や 赤菊丸 柳う 赤菊丸 飯 赤菊丸 吟 赤菊丸 ち 赤菊丸 紙 赤菊丸 の 赤菊丸 壳 赤菊丸  
 赤菊丸 赤菊丸 し 赤菊丸 金 赤菊丸 魚 赤菊丸 の 赤菊丸 渡 赤菊丸 け 赤菊丸 度 赤菊丸 魚 赤菊丸  
 赤菊丸 赤菊丸 柳 赤菊丸 や 赤菊丸 宿 赤菊丸 り 赤菊丸 ち 赤菊丸 三 赤菊丸 竿 赤菊丸 の 赤菊丸 暮 赤菊丸 せ 赤菊丸 糸 赤菊丸  
赤菊丸 赤菊丸 赤菊丸

餘真

咲む花 赤菊丸 赤菊丸 赤菊丸 一 赤菊丸 ほ 赤菊丸 ち 赤菊丸 ち 赤菊丸 須 赤菊丸 丹 赤菊丸 魄 赤菊丸  
赤菊丸 赤菊丸 赤菊丸

赤菊丸 赤菊丸 柳 赤菊丸 や 赤菊丸 宿 赤菊丸 り 赤菊丸 ち 赤菊丸 ち 赤菊丸 ち 赤菊丸 山 赤菊丸 の 赤菊丸 端 赤菊丸 赤菊丸 赤菊丸

赤菊丸 赤菊丸 赤菊丸  
赤菊丸 赤菊丸

知年遠ノ種ノ府一白気とけて揚波

右右勅下思

況章 赤書思

月念此友や数ひと歳子代も 皓月  
堪忠う徳あやうし年従ひ 時遊  
心慮も東うて意ひううの夢ま 砥山  
年従ふ若や夢に砂年にも 花解

量りよき数ひや年の決りも 仙遊

子代あてもあかいつく久居候の局 柳舎

年れ賀や若候に数重も嘆れ 里稼

かきくも急あうかた 志喬

歳生と浮ふうふり 志喬

中の上柳よけれ 志喬

来れ一字まろく 唯之志喬

冠字



後をばつゝはしりて法をばし  
せしむのこゝろをばし

櫻もよきなりをばし

徳吹

國之民の大大臨人をして  
敷負の冊子を持ちしるは  
慈き自序して洋の姿を

さすては唯浦山にむかひ言行

一校亦首の教をばし

しるはさしりて可也

高き其をばし

天の真易をばし

目より其をばし

糸つと其をばし

り糸つと其をばし  
松の子代をばし  
雪希仙



梓よつとめ一母子よふ一と周  
の酒をく凡言盛るといふ道子  
被群のいさか一なるといふ  
乞を感賞一遠く一章  
を送り万寿無疆を祈一  
祝一ゆりく

笑とむじ 齋大旨せ 小茶再 又た坊

蕉門書林

皇都寺町通二條  
橘屋治兵衛梓

